

■ 柴山盛生 情報社会関連研究系 准教授

【タイトル】

データベースを用いて日本の学術動向を明らかにする

【本文】

日本の学術動向や特徴を把握することは、他国との相対的なレベルを知り、学術振興のための効果的な戦略を立てるうえでとても重要です。そこで私は、研究者が獲得する研究費や、出版する論文数などのデータに注目して、日本の学術の状況を量的に明らかにしたいと考えています。

#### データベースが可能にした学術情報の量的な解析

こういった研究は、以前から重要だとわかっていたのですが、なかなか進みませんでした。その理由は、統計データの数が限られていて、しかも手作業で行われていたからです。そのため、これまではノーベル賞受賞者など、非常に少数の研究者を対象としていて、学術全体を見渡すのが難しかったのです。

この問題を解決したのが、近年進められている各種データベースの整備です。例えば、大学研究者が何を研究しているのかは、研究者ディレクトリーというデータベースに収められるようになりました。この整備には私自身も携わりました。これでようやく、各分野の研究者がどれだけいるのかという集計ができるようになったのです。同じようにして、科学技術研究費の取得状況についてのデータベースや、学術論文のデータベースなども整備されてきました。これらのデータベースの登場によって、学術情報を量的に解析することが初めて可能になったわけです。

#### 複数のデータを結びつけて多面的に学術状況を分析

私の研究では、別々のデータベースに収められている情報（因子）を結びつけ、相関関係や傾向を調べています。例えば、研究者ディレクトリーからは、個々の研究者の研究分野がわかります。しかし、研究費の獲得状況まではわかりません。論文という成果をどれだけ出しているのかも不明です。そこで、これらの情報をそれぞれのデータベースから取りだし、結びつけてやります。これで、誰が何の研究に取り組んでいて、どのくらい研究費を獲得し、どんな論文を出しているのかが、同時にわかります。これによって、学術の状況や特徴をより多面的にとらえる、それがこの研究の特徴の1つです。私は、さらに研究者による特許の取得状況を因子に加え、解析を進めています。

この研究では、国内でも最大のデータを集めて客観性を高めているので、ようやく学術動向の全容に迫りつつあると言えるでしょう。この研究が、大学評価や研究評価につながっていき、さらに研究者が創造的な活動をしていくためにはどのような環境を整備すべきかといった政策立案にも役立つと期待しています。

(取材・構成、中村理)